



袋高通信

あいのだより

'22 12月号

令和4年12月21日発行

通巻第186号

静岡県立袋井高等学校

総務課

ウィズコロナの
PTA活動

PTA会員の皆様には、本校教育活動にご理解とご協力いただきありがとうございます。

今年の学校行事も感染防止の観点から、例年のやり方から変更したのもあれば、同じように実施されたものもあり、感染状況によって、柔軟に対応していかなければならない力が求められているように感じます。PTA活動も中止されたものもありますが、今後のPTA活動の一つの在り方として検討を進めたいと思います。PTA活動だけでなく、生徒の様子も学校HP等を通じてお伝えしていきますので、ぜひご覧になってください。

本校PTA活動の中心は、PTA評議員による委員会活動です。生徒・保健委員会、広報・研修委員会、および進路委員会の三つの委員会によっていろいろな活動を展開しています。各委員会は一五〜一六名のPTA評議員で構成されています。これからもご協力よろしくお願います。

最後に、緊急連絡用に「きずなネット」によるメール配信を行っています。登録方法は、学校HPに掲載されています。是非ご覧ください。

(総務課長 齋藤 通也)

本年度の活動実績

四月 入学式
(新入生、保護者のみ)

理事会・評議員会

五月 PTA総会
(中止・委任状対応)

六月 緑風祭(三年保護者のみ)

バザー(中止)

参観会、地区会

(一・二年保護者)

七月 球技大会(生徒のみ)

九月 一学年PTA(二年保護者)

二年PTA(二年保護者)

体育大会(生徒のみ)

十一月 公開授業(中学生のみ)

学校保健委員会



体育大会より (PTA 広報班撮影)

教務課

早いもので、今年度も三分の二が終わろうとしています。みなさん、一学期の成績はどうでしたか？一年生については、五段階評定や観点別学習状況の評価の導入など、一・二三年生と比べて変更点がいくつかありました。そのうち、「主体的に学習に取り組む態度」の評価についていくつか質問が寄せられたので、簡単に説明いたします。

「主体的に学習に取り組む態度」は、知識及び技能を獲得したり、思考力・判断力・表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤を試みるなど、自らの学習を調整しながら学ぼうとしているかどうかという側面を評価します。したがって、単なる授業態度の良し悪しだけでなく、ノートやレポート等の記述や授業中の発言内容、自己評価や相互評価等の複数の要素に基づいて総合的に評価しています。二学期の評価をもとに、今後の学習の仕方について見直すきっかけにしてください。

さて、十月の種類・科目選択により、来年度のクラス編成の概要が決まりました。

新二年は文型一四八人、理型

一・二二人となり、文型四クラス、理型三クラスの編成となる見込みです。特進クラスについては、文型・理型に一クラスずつ設置する予定です。今後、本人の希望や学力をもとに選抜されます。

新三年の文型は、文Iコース（私立大文系希望）六〇人、文IIコース（国公立大文系希望）九六人となり、文Iコース単独クラスが一クラス、文IIコース混合クラスが一クラス、文IIコース単独クラスが二クラスとなる見込みです。理型の数学選択では、数学Ⅱ六七人、数学ⅠAⅡB演習一九人でした。理型三クラスについては、数学と理科（物理・生物）の授業は三クラス混合で三集団（数学はⅢ二集団、演習一集団、理科は物理二集団、生物一集団）となる予定です。また特進クラスについては、今年度（二年次）と同様に文型・理型に一クラスずつ設置します。

また、三年生の高校生活もいよいよ残りわずかとなってきました。三学期の登校日数は二〇日です。共通テスト終了後は午前授業となり、二月一日（水）より家庭学習日となります。二月二日（火）、二七日（月）が登校日、そして今年度は二月二八日（火）が卒業式です。自らの進路希望を実現するために、一日一日を

大切に、最後まで全力を尽くしてほしいと思います。

（教務課長 西尾奈緒美）



生徒課

二学期を振り返って

二学期が終わり、冬季休業に入ります。二学期には「体育大会」、「口ゴスの集い」、「疾風祭」など袋井高校の伝統的行事がありました。新型コロナウイルス感染症防止のため、従来通りの形では行えませんでした。が、生徒の自主的な運営のもと、それぞれの立場で積極的に参加し、一生懸命取り組んでいました。部活動においても活動の中心が2年生に替わる中で各種大会や発表会で好成績を収めています。

また生徒会から「衣替え移行期間の自由化」の提案を受け、職員会議で検討し認めることとなりました。更衣の時期を定めず、気温によって生徒が判断し、制服を着用するようになりました。その後の新たなルールを破り指導対象となる生徒も出ておりません。これからは生徒が主体的に行

動いていく力が必要となります。高校生活の中で身につけてほしいと思います。

さて、冬季休業を迎えるにあたり下記の点について御注意いただきましたと思います。一つは自転車による交通事故です。登下校において右側通行や、一時停止をしなかったり並進などをしていて、地域から苦情を頂いたり違反切符をもらったりするケースも多くありました。命を守る観点からも交通ルールやマナーを守り、時間に余裕を持った安全な登下校となるよう御家庭でも御指導をお願いします。また、登下校時の送迎のルールについても今一度、御確認をお願いします。本校では登校時については愛野公園駐車場や調整池を利用しての乗降を、下校時については18時を境に学校敷地内への車両乗り入れを許可しているところです。どちらも登下校時の学校周辺での事故を未然に防ぐためのものですので引き続き、御理解と御協力をお願いします。

冬季休業は短いですが健康に留意し、しっかりとした計画を立てて生活させてください。終業式には「冬季休業中の諸注意」を配布します。各部活動からも計画表が配布されますので、御覧ください。

（生徒課長 榊原 英裕）

進路課

来春の共通テスト

前回(2022年度)テストでは、数学の平均点の大幅ダウンにより全体の平均点も低くなったが、その他の教科は概ね5〜6割の得点率を維持している。センター試験は6割、共通テストは平均点5割程度が目標となっている。よって、今回(2023年度)テストでは数学は多少の難易度低下が予想されるものの、他教科は過去2回を踏襲して大きな変化はないと予想される。過去2回の過去問題と追試験問題をしっかり研究してテストに臨みたい。教科ごとに見る。

英語

さまざまなシチュエーションで読み解き解答させる、読解中心の内容だった。今後も図が挿入される問題の傾向は変わらないだろう。対策としては語彙力アップが最も重要な要素になる。また、リスニングに関しても、英語を母語としない話者が含まれる状況、1回読みが出題の半数以上を占める状況に変化はない。早期からさまざまな英語を聴く訓練や、民間の英語検定の受験などが主な対策となる。

数学

過去2回の出題で方向性が定まっ

てきた可能性が高く、形式に大幅な変化はないだろう。人物を登場させる、図を読み取らせるなど、単に式を書いて答えを導き出すという従来の問題とは異なり、国語的要素を含む問題が定着した。問題の文章量が多く時間内の処理が難しい部分がポイントとなる。前回の平均点が低かったことから、文章量の若干の削減、誘導の追加などの処理時間の短縮に向けた改善はあるだろうが、大幅な変化はないものとして、過去2回の問題についてしっかり研究したい。

国語

複数の文章(題材)を組み合わせて思考力・判断力を見る問題は、今回も出題されると考えられる。試行調査では実用文の出題があったため、評論文と組み合わせ出題される可能性もある。しかしながら、平均得点率が55〜60%と安定していることを考えると大幅な変化は考えにくい。複数の文章(題材)を扱う問題が出され、題材に実用文が含まれるかどうか。

理科・社会

センター試験の時から、人物の会話を提示し、資料(グラフ)を読み取って解答するという脱暗記の傾向があった。共通テスト移行後も、理科では多少高度な計算力を求める傾

向がみられるが、大きな方向性は同じ。思考力や判断力が求められる問題が増えてきているものの、まずはセンター試験の最終年度も含めた過去問題に取り組み、問いの形式を理解する必要がある。日頃の学習においては、基本事項の確認と共に、そのテーマで扱っている資料の確認を怠らないことが両教科の対策になる。難易度は変わらないだろう。

思考・判断・表現

大学入試センターが考える「思考・判断・表現」は何かを把握することが大事である。各教科の出題傾向は平均点から分析されることが多いが、成績上位者の得点率はさほど変化していない。結果的には、暗記ではなく、記述(説明)問題への対策を怠らなかつた受験生がより高い得点を得ている。日頃から「なぜそうなるのか」「どう表現するか」にこだわるのが、日常の具体的事象を一般化するような問題への対応になる。過去問題に取り組む際のポイントである。

現1年生

言語能力の向上と文化への理解が入試改革の核となる部分であり、学習指導要領改訂による影響があったとしても、現状からの大きな変化はないだろう。理数指導の強化を意識した観察・実験など、科学的探究を

目指す学習活動やデータ分析についても、現共通テストにその問いの方向性が示されている。学習範囲の変化により対策すべき内容は異なってくるが、日頃から「なぜそうなるのか」「どう表現するか」のこだわりが受験対策にもつながる。この意識をもって各教科の学習に取り組みたい。

(進路課長 原田 卓彦)



図書課

家族読書のすすめ

全国学校図書館協議会による「5月の平均読書冊数」の調査がある。本年度の調査によると小学生（4～6年生）が13・2冊。中学生が4・7冊。高校生は1・6冊（男子1・5冊・女子1・2冊）という結果である。また、一か月に1冊も読書をしていない割合は男子の場合小6の10・4%、中3で31%、高3で68・5%である。（読売新聞10月28日朝刊）なぜこんなにも学年進行とともに差が出てしまっのか。中高生が忙しいからという理由も当然考えられるだろう。『5分後に意外な結末』という本のシリーズが売れる時代、日常生活で優先されるものがSNSや動画サイトなどに変わってきた結果と言えるかもしれない。

また、児童生徒の実態として次のようなことが報告されている。

- 文字は読めても、文章が読めない。
- 本を読み慣れていないためか、描写や言動から登場人物の人物や心情を読み取るのが苦手である。
- 激しく変化する音と映像の刺激がないと物足りないと思う人が増えている。

○読むトレーニングが不足している。

る。

これらは本校生徒にも言える傾向である。共通テストになって、各教科の文章量がとてつもなく増えている現在、長文を集中して速く正確に読む力、行間を読む力が求められている。そのためにもぜひ「楽しい読書」をしてもらいたい。高校生に小さい頃に読んだ本の話を知ると『べりくら』『ハムとケロ』『おいしいのぼっけん』『エルマーのぼっけん』など自分の読書経験を更に楽しそうに話してくれる。たぶんあうちの方が読み聞かせをしてくれたり、自分でも昔読んだり、家族とともに本に触れた経験が今でも楽しい思い出として残っているからだろう。

以前「同じ本を読んで家族で話す」という課題を出したことがある。これが案外評判がよかった。高校生にもなると普段の会話さえままたならないことがあるのだが、同じ本の感想を家族で言い合うことがお互いに良いコミュニケーションの手段になったようであった。そこで提案である。「楽しい読書」を経験するためにぜひ「家族読書」を試してみよう。誰が好きかな本でも構わない。1冊を家族で読み合っただけで感想を言い合う。なんとも素敵な読書経験ではないだろうか。

(図書課長 戸塚 恵)

保健厚生課

11月下旬現在、コロナの感染は一向に収まる気配がありません。国内で開発された飲み薬の緊急承認や、幼い子供たちへのワクチン接種開始などの話題がメディアで日々取り上げられています。学校現場では、可能な限りの安全対策をしながら、生徒の教育を受ける機会を極力減らさない方向で活動を行ってまいりました。御心配もある中、保護者の皆様には、様々な面で御協力を頂いていることに心より感謝を申し上げます。

これから年末年始を迎え、3年生にとっては、共通テストや各大学・専門学校的一般受験に挑む大事な時期となります。コロナに対する「自衛」の継続について、先日の学校保健委員会では学校医の田中先生よりお話し頂いた内容の一部をこちらに紹介させていただきます。

自衛手段の第1はやはりマスク着用です。下図のようにエアロゾル感染（空気感染）と飛沫感染を減らすことができます。



中国での家庭内感染においてマスク着用が感染を減らした



マスク着用による家庭内感染の予防効果 (BMJ Glob Health. 2020;5(5))

マスクを着用することで浴びるウイルスの量や感染率を減らす



ウイルスを排出する側、浴びる側にサージカルマスクを着けた場合の効果を検証した研究結果

(引用元 <https://news.yahoo.co.jp/byline/kutsunasatoshi/20201221-00213537>)

また、複数の多重防護Ⅱ（スイスチーズモデル）によつて、より効果的な感染予防ができます。



スイスチーズモデルによる複数コロナウイルス感染予防 (引用元 <https://www.yomiuri.co.jp/pluralphoto/20211129-OYT8150001/>)

コロナやインフルエンザに感染することなく、生徒が心身共に万全の体調で、冬を乗り切ってくれることを願ってやみません。御家庭でのお子様へのサポートを今後とも宜しくお願いたします。

(保健厚生課長 中村 文子)

ICT研修課

お子様方の成長、育成を念頭に、研修課では教員を対象に様々な研修を行っております。教員の資質向上はお子様方の確かな学力の定着に大きく関わるとの認識のもと、研修には真摯に取り組んでおります。

今般のコロナウイルス感染防止対策により、教育環境が突然制限を受ける状況を目の当たりにし、いかなる状況下にあっても教育の質を担保することが教員の命題であるとの認識をあらたにしたところです。加えて文部科学省の提唱する「GIGAスクール構想」の実現に向けての取り組みにも拍車がかかり、教員全体の質向上は喫緊の課題であると認識しています。

本校では既にGoogleの提供するアプリを活用した教材作成やアンケートの実施などを行っておりますが、ICTをさらに有効に活用すべく研修に取り組んでいます。「生徒1人1台端末環境」の実現が高校では難しい現状がございますが、BYOD（生徒の所有する端末を学校で使用する構想）なども考慮に入れながら、お子様方一人ひとりに個別最適化されたICT環境の整備につとめているところです。本校の生徒全員がオンライン可能なLBO（学

校内Wi-Fi）も整ったところです。

同時に、そのような環境を十分に活用できるスキルが教員に求められています。「GIGAスクール構想」の実現には、何にも増して教員の柔軟な思考と向上心が必要であり、研修課の意義もそれに比例して大きくなっていると感じているところで

最後にオーストラリア研修についてですが、令和5年度より再開の予定であります。詳細につきましては状況が整い次第御連絡致します。

（研修課長 久野 正幸）



一年部より

1年生「学年だより」絶賛(?) 発行中

1年生の「学年だより」は2学期よりリニューアルし、学年部の職員に原稿を依頼しています。テーマは「大学での専門的な学びや進路選択に関する話等」です。生徒たちの目が世界に開かれ、彼らの世界が広がっていくようなかわりをしたいという想いで始めました。11月末現在、3号で5名分を掲載しました。内容は数学・救命救急・文学・剣道・人生と多岐にわたっています。ある日授業に行くと、10月発行分を食い入るように読んでいる男子生徒がいました。「おもしろい?」と声をかけると、「はい。ほかの先生のものはないんですか。」という返事が返ってきました。非常につれしかつたです。今後も続けていきます。

世の中が便利になり、インターネットで調べれば瞬時に様々な情報を入力することができます。日本語ではググるといふ言葉が生まれ、英語ではgoogleという動詞が英英辞典に掲載されているほどです。しかし同時に、身近な大人の声を聞くことも子どもたちにとっては有意

義であると考えます。「何が語られたか」と同等に「誰が語ったか」も情報として大きな価値を持つており、その言葉にはその人物という文脈が存在しているからです。皆さんも「〇〇さんが言うのなら…」といった経験があると思います。成長や学習とともに子どもたちの世界は広がり、所謂インフルエンサーを広く社会に求める一方、依然として身近な大人の影響力は大きいのです。本校教職員のかかわりがお子様によい影響力を発揮できればと願い、日々活動しています。

（蛇足ですが：以前、英語教員向けの研修で聞いた「子どもは思うようには育たない。されたように育つ。」という言葉に肝を冷やしたのはここだけの秘密です。講師の意図は「普段から英語使用者として生徒たちのロールモデルになりなさい」だったので、子育て中の私には別の重みを持って響いてきました。）

（1学年主任 藤井 元喜）



二年部より

受験生としての心構えについて

修学旅行、2学期期末テストが終了しました。師走もおしせまり、2学年の生徒にとって大切な「2年の冬休み」が始まります。

修学旅行の翌週、11月21日の授業で、「今日からみなさんは受験生です」とお伝えしました。実際、3学年では既に総合選抜型、学校推薦型の入試は終了し、可否も発表されています。そういう意味では、既に受験まで一年を割っていることとなります。

しかし、「ここで申し上げたいのは、早期の受験を勧めることではありません。せん。

総合選抜型、学校推薦型の入試は、飽くまでも「第一志望合格」のための手段です。私立大学は、受験生数の減少傾向により、3月まで努力して第二志望校に合格するケースが散見されます。合格を焦り、やみくもに早期の受験を考えるのではなく、本来に入学したい大学に合格できるよう、学習に集中することが大切です。

現在、2学年では「第一志望届」の作成を始めています。この取り組み

みは、袋井高校で毎年実施しているものです。もちろん、この第一志望は3学年になってから変更される可能性はあります。しかし、現段階で、この大学を選んだのはなぜか、自己を見つめ、社会とのかかわりを考え、その学問にどう取り組んでいくのか見通しを立てる、その道筋を体験することが重要です。この経験は、結果的に志望理由書や小論文で応用ができるからです。

受験をする生徒自身が、「自分のこと」として受験を考え、計画的に学習準備を進めることが重要です。他人事ではなく、「自分のこと」なのです。ご家庭でも、折に触れて受験の心構えや、お子様がどのようなことに興味をもっているのか、なぜその大学に行きたいのかなど、話題にしてください。

(2学年主任 大石 真理)



三年部より

「チームF」感謝と自信

大学入学共通テストまで、あと30日。(12月15日現在) 準備はどのくらいですか。

今年度、全国高校総体陸上競技の男子100mで31HRの銭田瑞生さんが、見事に全国インハイのファイナリスト(決勝進出)となり、全国8位入賞という夢を叶えました。全国ランキング40位である選手が、なぜ勝負とする大会で最大限の力を発揮できたのでしょうか。

本人に聞いてみました。銭田さんは、「感謝と自信」という言葉で説明してくれました。「感謝」とは、自分ひとりではなく、周囲の支えや協力により、はじめて真剣勝負(走ること)ができることへの感謝を強くもっていたことです。また、家族、友人、チーム、学校、地域、県などの想いを背負い、恩返しや地域貢献をしたという姿勢があったそうです。「自信」とは、とにかく準備に徹することで得るものだと思います。特に、目標を設定し、そこに至るまでのビジョンを明確にして計画性をもつことが大事で、途中で結果を求めて焦らず、計画した一つひとつを信じてこなしていくだけと答

えてくれました。

実際に部活動顧問として銭田さんを見ていて、とてもアスリート偏差値の高い生徒だと感じていました。主体性があり、自己分析が得意で、自己の課題を分析して、創意工夫されたより効果的な解決方法を考え、誰よりも努力して粘り強く実行していく姿勢がありました。また、勝負脳を意識しており、常にポジティブな言動や行動をしていました。

受験という勝負の世界で、共通するものがあるのではないのでしょうか。ぜひ、参考にして大事な場面で、最大限の力が発揮できる徹底的な準備をしましょう。

部活動等で経験があるかもしれませんが、例えば、高校二年生では、あまりうまくいかなかったことが、努力を続けて、高校三年生になり活動の最後に大きく成長したなど、があると思います。大学入学共通テストまで、あと30日。努力してきた生徒は、まさに今からが一番伸びる時期なのです。一月に入ると、一週間単位、いや一日単位で学力の向上を見せるのが袋井高校生です。ぜひ、途中で妥協することなく伸び期を楽しんで最後まで戦い抜いて下さい。

三年部一同、最後まで生徒と一緒に走っていきます。

(3学年主任 杉浦 伸幸)